

❖共同研究プロジェクト❖  
マレー世界における地方文化

### 平成 18 年度第 2 回研究会

【日時】2006 年 7 月 2 日(日)午前 10 時 30 分から午後 5 時

【場所】AA 研セミナー室 (301)

#### 【報告】

1. 黒田景子 (鹿児島大学)

「パタニを表象するもの—Web 上の南タイ分離主義運動」

2. 川島緑 (上智大学)

「マラナオ語雑誌『新時代』創刊号巻頭言」

3. 全員

「講読：カラム創刊号 pp. 3-4」

#### 【報告の趣旨】

### 1. パタニを表象するもの—Web 上の南タイ分離主義運動

本報告は、南タイの分離独立運動組織が Web 上で「パタニ・アイデンティティ」をどのように表象しているかについての報告である。

タイ南部のパタニ、ナラティワート、ヤラーとソクラー県の一部は、歴史的に旧パタニ王国の領域であり、人口の約 80%がムスリムである。さらに日常言語としてマレー語、とくに Yawi (Jawi) と呼ばれるパタニ・マレー方言を使用している。

この地域のムスリムは、歴史的にはシャム中央へ朝貢=従属関係にあった旧パタニ王国への帰属意識をもち、ラタナコーシン朝による 18 世紀末以降の、シャムによる中央集権化と近代統治システムの導入過程で、パワーセンターとしてのパタニの地位の凋落を経験してきた。

19 世紀後半以降のシャムはタイ王室と仏教とタイ語を「タイ的国民国家」の最重要要素として押しだし、中央的なタイ的価値観を浸透させようとしてきた。南タイムスリムはこの「タイ的」近代国家において、その公的アイデンティティになじめず、権力・資本・文化要素にお

けるマイノリティ集団である。タイ中央の統制の浸透に伴って、彼らの「パタニ・アイデンティティ」とでも言うべきものは先鋭化する。特に、タイ語教育の義務化とパタニの伝統的イスラーム教育機関であるポノへのタイの介入はイスラームを否定するものとして激しい反発を生んできた。

この地域の分離独立運動は、イスラーム教育の保障とマレー語の公用語化の要求、貧困と資本の中央集中と「タイ化」への反感として生まれた。1948 年のパタニウラマー、ハジ・スロンの逮捕事件とドゥスンニョール反乱は「反シャム」としての象徴的事件である。

分離独立運動はその後 70 年代には爆弾テロを含む過激なものに発展し、タイ政府は軍事力によってそれを鎮圧するという方針をとってきた。

80 年代以降、タイ政府はムスリムとの対話と特例措置をとり、それが一定の効果をあげてテロは鎮火傾向に転じた。政策の基本方針は変わらないものの、ムスリムの側の世代交替とともにタイ語に対する態度の軟化がみられた。軍部が分離運動組織メンバーに呼びかけた「投降と恩赦」の結果 97 年の期限までに、組織は、投降したグループと、国外へ逃れたグループに二分した。2000 年には軍部は南タイ分離運動は壊滅したとまで考えるようになった。

国外にでた分離運動組織は武装闘争以外の手段としてインターネット上にその主たる活動を置いた。代表的な組織である PULO の他、ニュース情報を提供するサイトなど複数の組織がある。

インターネットは南タイに関するローカルな情報や分離組織からの言説にグローバルな場からのアクセスを可能にした。2000 年以降の東南アジアでのインターネット普及率の伸びがその背景にある。

Web 上での分離運動組織の活動は、当初は

技術的な問題からアルファベット使用によるマレー語と英語で始まった。マレーシアや中東・インド地域等のムスリム層にも南タイに関する情報や主張が提供される。さらに、ブラウザ上でタイ語の表示が可能になると、マレー語、タイ語、英語の三つの言語が混在する情報提供サイトが登場した。2004年南タイでテロ活動が再燃し世界の耳目を集めると、BBS参加者によるトリリンガル状況での議論も活発になった。

タイ政府は「違法サイト」としてこれらのサイトをタイ国内から追放したが、Websiteはスウェーデン、トルコ、などに発信地を変え、アドレスを変更して情報を提供し続けており、タイ警察とのいたちごっこが続いている。

分離主義組織のサイトでは、タイ政府への非難、南タイにおけるムスリム自治の要求、公用語としてのマレー語の使用などが主張される。しかしながら、代表的な組織のBERSATUなどはアラブ主導のイスラーム主義には同調を拒否し、パタニの独自性を主張する。Webのデザインはイスラーム的なものであると同時に、2004年のテロの現場写真、パタニで作られた大砲やクルセモスクなど、歴史的にパタニとシャムとの対立の場、あるいは、イスラーム教育の中心としてのパタニを視覚的にあらわすものである。これらは分離運動組織が確立しようとするパタニ・アイデンティティのイメージでもあるが、タイ政府の「タイ化」政策への対抗からか、きわめて典型的な非タイ的「国民国家」像を想起させる。

ポノでの教授言語でもあるJawiの使用も彼らの主張の一部である。(Webでは技術的な問題から2006年現在一般的な表記は困難である)

2006年タイ政府は2007年から南タイにおいてはじめてマレー語による教育の一部の導入を検討すると発表した。また、ネットではタイ語によるイスラーム教育も開始している。一方マレーシアではマレー語教育プログラムにおいてJawiの読み書きの強化が2004年から復活している。

民族文字、民族言語としてのJawiの扱いがどのようになるのか、パタニの状況にどのよう

に影響するのか、今後も注目していきたい。

## 2. 英語・マラナオ語雑誌『新時代』創刊号巻頭言

1968年、フィリピン、ミンダナオ島南ラナオ州で刊行されたマラナオ語(ローマ字、アラビア文字)・英語の2言語月刊誌『新時代(Bago a masa)』を創刊した。マラナオ語版編集者は、アズハル大学卒業者を中心とするマラナオ人中東留学ウラマーのグループであり、英語版編集者は、西洋式高等教育を受けたマラナオ人ジャーナリストであった。本報告では、同誌創刊の経緯を説明し、マラナオ語版巻頭言の翻字・邦訳を紹介した。マラナオ語版巻頭言では、イスラームについての知識を広めるとともに、フィリピンや世界の情勢を知らせ、郷土に進歩発展をもたらすという抱負が述べられている。従って、本誌マラナオ語版刊行の目的は、イスラームの教えと近代的知識の双方の普及により、ラナオ地方の人々を啓蒙し、社会を進歩させることにあったといえる。本誌が2言語で発行された理由は、南北ラナオ州に住む非マラナオ人(主としてピサヤ系の言葉を話すキリスト教徒住民)、および、英語に堪能な高学歴マラナオ人も読者として想定していたためである。しかし、マラナオ語版と英語版は別々に編集され、マラナオ語版ではイスラームの基本的知識に関する記事が大半であるのに対し、英語版では地方政治や社会に関する記事が多く、両者の共通性は乏しい。従って、2言語雑誌と銘打ってはいるものの、同誌が英語使用者とマラナオ語使用者に共通の言論空間を提供したとは言い難い。英語版発行に関しては不明の点が多いので、政治や行政との関係も視野に入れ、今後、より多面的に検討する必要がある。

## 3. 講読：『カラム』創刊号 pp. 3-4

前回研究会の合意にもとづき、シンガポールで発行されたジャウィ雑誌、『Qalam(カラム)』の講読を開始した。

(黒田景子、川島緑、新井和広)